

## 書評

高橋康史著

## 『ダブル・ライフを生きる〈私〉——家族に犯罪者をもつということ』

(晃洋書房、2020年)

佐藤 まどか

本書のタイトルは家族に犯罪者をもつ【人】ではなく【私】という一人称を用いている。この【私】という文字が一人一人固有のヒストリーを浮かび上がらせる。本書は家族に犯罪者をもつ者がいかにアイデンティティを管理するのかを明らかにすることを目的とし、Goffmanのスティグマ論を検討しつつ、インタビュー調査における語りを理論的観点から分析している。Goffmanは〈ダブル・ライフ〉という概念でスティグマを負う者が持つ二つの自己(常人としての自己とスティグマを負う自己)を生きていることを説明しており、本書ではこの観点から犯罪者の家族がいかに犯罪者の家族になるのかを問うている。

著者も述べているように犯罪者の家族は家族が犯罪者になるまでは常人の暮らしをしている。それはある時点からあちら側とこちら側に線引きをされ二度とあちら側には戻れないという烙印を押されたようなものではないか。それはその問題が起るまでは他人事だと思っていた自分を知る瞬間であったかもしれない。私(評者)は以前自死遺族団体が共同で作るパンフレットに「他人事だと思っていた」という文字とハートが壊れる絵を提案したことがある。突然遺族になった苦しさや社会からの偏見をイメージし啓発の意味もあったのだから遺族団体からの反対意見もあり短期間で切り替えられた。少しずつ起こっていた歪みがある日爆発するように家族は突然の変化を突き付けられることがある。家族は時に責任を問われ時に支援対象とされる。家族は個人の支援に対しての社会資源として活用されることも多くそのことが責任を問われることにも繋がり本書から「家族とは何か」という新たな別の問いも見えてくる。

犯罪加害者家族であり犯罪被害者家族である男性は「普通」ではない自分が普通の家族を望んでしまわないように戒めとして入れ墨をし自分に見

える形で烙印を押していると語っている。育ちの過程で突然安心の場を奪われた彼は被害者でもあるにも関わらず加害者側として社会からの期待(カエルの子はカエル)に沿っていく形で生きていくのである。著者は「犯罪者の家族」としての自己のみを受け入れているように見せかけながら常人としての自己も生きていた、とし「正常」と「異常」の読み替えを行うことを通じた〈ダブル・ライフ〉の再定義であり〈ダブル・ライフ〉を活用しながらアイデンティティ管理を行っていた(P141)と述べている。

また注目すべきは7章でスティグマを負う者同士としての語りでは解決できない問題をあげているところである。著者は「犯罪者家族」と「加害者家族」とを明確に分けて論じている。私(評者)は相談の中で犯罪者家族が加害者側として被害者家族に対しての思いを強く持っていることを感じたことがある。被害者家族に対して感じる「普通に暮らしていることの申し訳なさ」や「目立つ言動を決してしないように努める」という行動はまさに加害者の家族であるという固有の生きづらさであったと思われる。著者の言うスティグマを負うという類似性では語り得ないものがそこにある。終章で著者は社会を対概念とする「犯罪者の家族」と犯罪・非行の被害者を対概念とする「加害者の家族」という二重の意味を持つ自己を生きしており、二重の自己を切り別けたうえで、論じることが望ましい(P238)とした。また二重の自己を生きるという点において著者は社会的属性に着目した考察が出来ていないとし「特に家族役割による細密な差異やその特徴については取り組むことができていない」と述べている。家族であっても立場が違ふと思いが違ふことは自死遺族相談をしている私(評者)も感じている。さらに言えば同胞であっても年齢が上か下かでも違いがある。「加害者の家族」としての申し訳なさも親である場合と子どもである場合、同胞である場合など属性による違いがあるであろうことは否めない。今後の著者の研究に期待するところである。

終章で著者は従来のスティグマ論やアイデンティティ論で〈ダブル・ライフ〉が重要視されてこなかったことを指摘しており、〈ダブル・ライフ〉

がアイデンティティ管理の一つの資源となり得るとしている。

〈ダブル・ライフ〉を乗り越える過程は、「彼／彼女らが自らに対する差別的なまなざしから解放される過程として捉えることができよう」(P 236)と述べ、スティグマ経験には自己による自己への差別も内包されていることを明らかにした。

ダブル・ライフを生きる〈私〉は終章ではダブル・ライフを生き抜く〈私〉となり、スティグマを引き受けつつ葛藤し折り合いをつけながら生きていく多くの【私】への深い思いを感じるのである。多くの学びを得る機会となったことを感謝したい。また、これは「人と違う」ことを常に強く感じ数多くの差別体験に直面してきた著者自身の【私】が生きてきた姿であり生き抜く姿であると感じた一冊であった。